

精神と象徴

加賀楽焼の奇才と呼ばれた開発文七の魂を受け継ぐ
二代文七（文明）。
大樋焼と楽焼の魅力に惹かれ、
陶土や釉薬、焼成、造形において独自の研究を重ね、
茶陶の世界に新分野を開拓。
その作風は茶の湯の侘び、寂びを極め、斬新で秀逸。
茶陶に命を捧げる金沢が誇る名工、二代開発文七。

二代 開発 文七 [茶碗] 展
2023年5月14日①～7月2日①

[開館日] 水・木・土・日曜日 11:00～16:00（入館は15:30まで）●入場無料

[休館日] 月・火・金曜日

[会 場] 緑ヶ丘美術館・別館 → 〒630-0262 奈良県生駒市緑ヶ丘 1426-38

[U R L] <http://mam-museum.com> <お問い合わせは FAX で : FAX. 0743-85-7879>

MAM-ANNEX

Midorigaoka Art Museum

緑ヶ丘美術館・別館

東大寺の故 清水公照老師の揮毫。
二代 開発文七氏に贈った自筆の書
*「一火神変」とは：一心に焚く窯
の中には神が宿り、その力によって
すばらしい作品が創られるの意。

一火神変



赤楽茶碗 銘 鬼の涙



胎釉茶碗 銘 凡人



辰砂茶碗 銘 おんな心



強焼締茶碗 銘 鉄心

「精神と象徴」

日本における茶碗の存在は、造形物であつて造形物でない、もつと深い精神的な存在である。
日本が世界に誇る侘び寂び文化を代表する象徴的な存在である。
だからこそ、この小さな掌にのる存在に敬意を払い大切にするのである。
精神ゆえに尊い、精神ゆえに難しい。
そして、ありがたい掌の仏であり、宇宙である。
——二代 開発文七

二代 開発文七 「茶碗」展

Bunshichi Kaibatsu II

掌に包みもつ小さな茶碗に際限なき空間を映し出す二代 開発文七。自然の四大要素である「土、空気、水、火」を操り、その姿は超然として狷介孤高(けんかいこうこう)を貫く。茶陶、「楽」に魅せられ独自の境地を切り拓き50年。その素朴で原始的な力強さと繊細で気品漂う優しさの表現は茶人を唸らせる。

どこを見ても、どこに触れても飽きさせることがない陶の深い存在感。

「私はいいいものを作りたいだけ」の言葉が全てを語る。

本展では茶碗や花器、水差しを展示いたします。二代 開発文七の希少な展覧会です。この機会をぜひお見逃しなく、ご案内申し上げます。



窯変焼締赤楽茶碗 銘 不可思



窯変粉引水指 銘 深海



窯変粉引長重 銘 名月

◎二代 開発文七 (かいはつぶんしち)《陶歴》

- 1945 年 石川県金沢市に生まれる
- 1970 年 金沢美術工芸大学彫刻科中退
- 1971 年 初代 開発文七から大槌焼の指導をうけ作陶を始める
- 1972 年 初代から春日山窯を継ぐ
- 1973 年 金沢にて初個展
楽焼(茶陶)の研究に専念する
特に黒楽、赤楽、白楽、辰砂釉、造形、焼成、高台、釉薬において他に類を見ない独自の陶芸の世界を展開
- 1979 年 金沢郊外四坊町に新工房を作り松薪焼成による穴窯築窯
自然釉、焼締による花入、食器等の制作
特に粉引瓶、壺に力を入れ研究する
- 1989 年 二代 開発文七を襲名
- 1994 年 初代 文七作品集「奇才文七楽茶碗」発刊
- 1995 年 二代 開発文七作品集「WAN」発刊
- 1997 年 二代 開発文七作品集「火可華」発刊
- 2001 年 以後初心に帰り茶陶に専念する
- 2005 年 従来のいろいろな技法を総括して新境地を拓く
大槌胎釉、新焼締、青釉等を展開
近年は仏の道に関心深まり作品に反映を願う
- 2017 年 春日山窯から文七窯に改称する
アメリカンクラブ(東京) 個展
- 2022 年 二代 開発文七「書・花・茶」南無阿弥陀仏・書展(金沢・廣誓寺)
二代 開発文七「板書と写真」展(石川県西田幾多郎記念哲学館)
現在に至るまで、師を持たず、どの団体にも所属せず、既成の概念にとらわれない、自由な表現の中で独自の道を歩む。
各地にて個展を中心に作品発表。

MAM-ANNEX

Midorigaoka Art Museum

緑ヶ丘美術館・別館

〒630-0262 奈良県生駒市緑ヶ丘 1426-38
URL: <http://mam-museum.com> FAX: 0743-85-7879